

日韓宗教文化のトランスナショナリティ

代表者・司会 櫻井義秀
コメンテータ 田島忠篤

韓国における社会変動と日系新宗教の布教

李 賢京

グローバル化とともに、政治、経済、文化だけではなく、宗教においても「脱境界」現象がみられるようになった。これは、当該社会が他宗教を日常的に受け容れていることであり、他宗教の世界観や価値観、道徳などを単に容認するという慣用的な立場を超え、それらを積極的に受け容れる価値意識を有していることを意味していることもある。韓国において日本の新宗教が受容され、拡散している現状もこうした脈略のなかで理解することができる。それは「歴史問題」をはじめとする日韓両国の間に多くの葛藤要因が存在するにもかかわらず、現在、十八教団、約一九〇万人を超える日系新宗教信者が韓国内に居ることや、彼らのすべてが韓国人である事実からでも確認できる。

今日の韓国社会は、五〇〇年を超える朝鮮王朝時代の間、制度宗教としての役割を果たした儒教と仏教のような東洋の伝統宗教と、近代以降、欧米の宣教師によって受容されたプロテスタントやカトリックのような西洋のキリスト教が土着し、さらには新興宗教運動によって生まれた韓国の諸新宗教や民衆によって受け継がれてきた民間信仰などが混在しているのである。

一方、植民地時代を通じての日本人の渡朝とともに、多くの日本の宗教が朝鮮半島に布教された。しかし、日本の敗戦によって植民地期が終わり、一九四五年に米軍政が開始されることになって、すべての日本の宗教は米軍から強制解散の命令を受けた。その結果、韓国人信者たちは日本の宗教から離れることを余儀なくされ、多くの日本の宗教団体が朝鮮から撤退していった（天理教だけは存続）。その後、一九六五年の「日韓国交正常化」の成立によって、日本の新宗教が韓国国内での布教活動を再開していった。

他方、韓国では、かつて日本の大衆音楽、映画、漫画などの大衆文化を禁止していたが、一九九八年より日本の大衆文化が徐々に開放された。それによって、日本の漫画・映画・ドラマ・音楽など様々な文化コンテンツが、韓国の若者の日常に自然に溶け込み、若者の間では「日流」ブームが起こった。しかし、日本文化は韓国の若者に大きな影響を与えているとはいえず、韓国人の間には植民地支配、領土問題などから生じる「反日感情」はまだ根強く存在している。そのため、一般的に、韓国人の間では日系新宗教は否定的に認識されている。こうした韓国社会における相反する日本観が混在しているにもかかわらず、日系新宗教は拡散されたが、その理由は何だろうか。

一つは、日系新宗教の最大の特徴である現世志向主義的な宗教実践と韓国の既成宗教との差別化である。韓国では、現在まで信者中心の宗教教団が成功した前例はない。つまり、「在家信者」や「平信者」が主体となつて信仰できるということが多くの韓国人信者を魅了したと考えられる。二つは、国交正常化

以降、布教を再開し教勢を拡大した日系新宗教は、その時期が韓国の軍事政権の下での強力な近代化政策の推進と「漢川の奇跡」といわれた高度経済成長期、それに伴う離村向都が生じた時期と重なっている。こうした状況のなかで韓国の伝統的価値観が崩れ始め、工業化・都市化に見合った価値体系が必要とされた。たとえば、創価学会(KSGI)は、現在の不満足な境遇は自ら前向きに取り組んでいくことで「宿命転換」ができ、プラス思考で「変毒為薬」して道を開くことができることを積極的にアピールしたが、そのような考え方は、伝統的社会ではなく都市社会―個人の努力によって生活の向上が可能な流動化した社会―と親和的であったのである。

韓国のメディアを通じてみる「倭色」宗教

諸 点淑

韓国では、日本系宗教が「倭色」宗教とも言われている。「倭色」とは「和風」「日本風」「日本的なもの」を意味する。つまり「倭色」宗教とは日本で生まれたり、あるいは日本的な傾向を持つ宗教を意味する。韓国のメディアにおける「倭色」宗教は、一九六五年「日韓国交正常化」を発端として韓国社会に登場することとなった。「日韓国交正常化」は、日本系宗教の本格的な韓国進出の踏み台となったが、むしろメディアを通じて、「倭色」宗教への批判と警戒を促す新聞記事が韓国社会に拡散される契機にもなった。その後、一九九五年、日本で発生した「オウム真理教事件」により、日本系宗教を警戒する内容の記事が新聞で大きく報道され、日本系宗教に対する排他的

な機運が韓国社会により高まることとなった。このような韓国社会に刻印された「倭色」宗教という日本系宗教への敏感な反応は、毎年八・一五記念日(日本から解放された日)になると、確実に再生産されてきた。だが、皮肉にも韓国社会の反日感情の中においても日本系宗教の信者は増加しつつあるのである。

本研究では、このような反日感情の中でも教勢や信者が増加している日本系宗教の現象に注目して、日本系宗教、つまり「倭色」宗教が韓国社会に定着していく時代的流れや「倭色」宗教に対する今日の韓国社会における認識の変化を、新聞記事を通して考察することを目的としている。「倭色」宗教は、植民地という歴史を経験するなかで形成された、日本的なものに対する反感や被害意識などといった複合的な情緒の中で、韓国社会に深く根を下ろしていった。しかし、このような意味合いを有していた「倭色」宗教であるが、二〇〇〇年代に入ってから、批判と警戒をこめた新聞記事が前に比べ大きく減少する現象をみせている。これはおそらく、「倭色」宗教に対する韓国社会の関心が薄まりつつあることを意味すると同時に、韓国社会における「倭色」宗教への認識が変化したものとしても解釈できるだろう。無論、こういった現象には、日本系宗教の韓国での土着化過程や積極的な社会活動も一役買ったであろうことも見逃せない。

「倭色」宗教をめぐる韓国社会の認識変化を新聞記事を中心に捉えるため、本研究では、一九六〇年代から現在に至るまでの「倭色」宗教と関連する新聞記事を検討し、時代別の報道状況と韓国社会における反応を分析する。また事例研究として、